国際貿易都市として隆盛

福岡市は住みよい街だと言われる。開放的な風土や、人々のいい意味での「軽み」を帯びた気質に起因すると考えられるが、それらは、この地に層となって折り重なる歴史が醸成してきたものであろう。

弧状をなす日本列島の西の端にあって、九州北部の玄界灘に面し、ユーラシア大陸と朝鮮半島に近接するこの地は、太古より、大陸の先進的な文化や物品が国内で最初に入ってくる場所であり、人々は対外的な脅威にさらされながらも、経済活動を発展させ、豊かで賑やかな都市を営み続けてきた。

福岡市博物館では、展示によってこうした福岡市の自画像を描こうと、歴史や文化、考古、民族に関わる資料を収集してきた。それらを介して歴史を遡っていくと、旧石器時代や縄文時代の道具に、朝鮮半島のものとの類似性があり、当時からの対外交流の存在を示唆している。

また、弥生時代中期の後半になると、個々に発展していた村々が統合し、各地に「国」が形成されていくが、稲作文化の先進地帯であった北部九州でひときわ大きな勢力を築いていたのが「奴国」である。現存する遺跡や遺物によると、福岡市のルーツとも言える最初の政治的な統合体として確認できるのは、この奴国であった。

江戸時代後期の天明4（1784）年、金印「漢委奴国王」が志賀島（福岡県東区）で発見された。中国の歴史書『後漢書』に、西暦57年に後漢の光武帝が「倭奴国」の使者に印綬を与えたという記載があり、それがこの金印と考えられている。奴国をはじめ北部九州の有力な王たちが、朝鮮半島や中国に使者を送り、活発に交流していたことは、市内から出土する中国系の鏡や貨幣などが雄弁に物語っている。頻繁に行き来があり、この時代の福岡はまさに大陸との交渉の表舞台だったのだろう。

古墳時代から奈良、平安時代は「日本」という国家が形づくられていく時代だが、豪族たちがさまざまな大陸との結びつきを築いていた北部九州は、ことさら重要な土地だったと考えられる。

福岡市中央区から遺構が見つかった「鴻臚館」は、7世紀後半から400年の間、世界に向けての日本の顔だった。鴻臚館を拠点に、ヤマト政権としての外交や対外交易が行われ、国際交流が積み重ねられていった。

その後、交易拠点は博多に移り、「博多綱首」と呼ばれる博多に居住する宋（中国）人が貿易の担い手となり、博多は国際貿易都市として発展していく。

中世の時代は、現代のわれわれが想像する以上に人々が大陸と頻繁に往来しており、物品だけではなく、新たな時代の宗教や思想も入ってきた。禅宗もその一つであり、日本に禅宗を広め、「禅宗の祖」と呼ばれた栄西は、博多から二度、宋に渡ったが、最初の入宋から帰国して二度目の渡航までの足掛け15年間、博多湾周辺一帯で宗教活動をしている。

鉄道の未来学 基調報告 42

アジアに最も近い都市、福岡。
古来、この地の人々は、大陸との交流を通して豊かな都市を営んできた。
積み重ねてきた特色ある歴史と、その歴史の地層に育まれてきた都市の個性。
住みよい街との評価が高い福岡の成り立ちを探る。

福岡・博多の都市形成にみる歴史と風土

九州大学名誉教授
福岡市博物館 館長
有馬 学
Manabu ARIMA

鹿児島県出身。1971年東京大学文学部卒業、76年同大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。九州大学文学部教授、同大学院比較社会文化研究科教授を経て、2009年に停年退職。2012年から福岡市博物館館長。歴史学者、専門は日本近代史。著書に『日本の近代4「国際化」の中の帝国日本』、『日本の歴史23　帝国の昭和』などがある。

取材・構成◉茶木　環／撮影◉三好邦次

庶民文化の開花

14世紀の南北朝時代以降は、国際貿易都市の博多をめぐって争いが繰り返され、戦国時代、博多は戦乱に巻き込まれ、幾度か焼き打ちにあった。天正15（1587）年、九州平定により、博多の戦国時代に終止符を打った豊臣秀吉は、戦乱で荒廃した街の復興に着手する。後に「太閤町割」と呼ばれる大規模な区画整理で、この街区は現代の福岡の都市構造に通じるところも多い。

福岡の生みの親、黒田孝高（官兵衛）・長政父子は、織田信長や豊臣秀吉、徳川家康といった天下統一を狙う有力な武将の下で活躍した。

長政は、慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いの功績で家康から筑前国を与えられて初代福岡藩主となり、7年の歳月をかけて、博多の西隣に福岡城とその城下町を築いた。これにより、新たな武士の町「福岡」と商人の町「博多」、那珂川を境界として新旧の町が共存する双子都市が誕生する。

江戸期の鎖国政策で、国際貿易都市としての役割を無くした博多は、商工業都市として整備され、近世城下町の一部に組み込まれ、二人の町奉行の下、自治が行われた。

参勤交代の制度化や海運業の発展に伴い、各地の産物や文化が福岡と博多に持ち込まれ、庶民の娯楽でもあった祭りや行事も賑やかさを増し、一時期途絶えていた年賀行事の松囃子が再開。筥崎宮放生会も再興され、博多祇園山笠では追い山が始まり、現在に受け継がれている。

福岡市の誕生

明治4（1871）年、廃藩置県によって福岡県が成立した。その5年後、旧藩単位で設定された県域が再編され、ほぼ現在の県域となった。これに伴い、福岡県庁は福岡城内から「天神」に移転し、天神地区に官公庁街が形成されていく。明治22（1889）年4月1日、市制施行により、現在の中央区の一部と博多区の一部を合わせた福岡市が誕生した。市の名前を「福岡」にするか「博多」にするかで議会は紛糾したが、議長の採決で「福岡市」に決まった。

明治期に入り、変貌を遂げる福岡市ではあったが、当時は必ずしも「九州の中心地」という位置付けではなかった。人口は、江戸時代に国内で唯一の貿易港であった長崎市の方が多かった。旧制の高等教育機関も、明治20（1887）年にナンバースクールの第五高等学校（現・熊本大学）、明治34（1901）年に第七高等学校造士館（現・鹿児島大学）が設立されている。長崎、熊本との誘致合戦の末に明治36（1903）年に京都帝国大学福岡医科大学が福岡に設置され、さらにそれが明治44（1911）年に九州帝国大学（現・九州大学）となったことは、この頃ようやく福岡市が九州の中心都市の位置を占め始めたことを示している。

さらに産業化という点では、現在の北九州市の方が早い。門司港が港湾機能を

拡大して、明治22（1889）年に国の特別輸出港となり、小倉駅は、現在のJR九州の鹿児島本線と日豊本線の結節点であり、交通の要衝となっていた。明治34（1901）年に官営の八幡製鐵所が操業を開始して以降、工場や関連分野の産業が集積し、重化学工業によって栄えていった。新聞社なども小倉を九州の拠点としていた歴史がある。

当時は近代都市イコール工業都市であり、福岡市も博多港を整備して工業都市を目指したが、北九州の諸都市の圧倒的な経済パフォーマンスの前では実現しなかった。

九州随一の都市への飛躍

近代都市として、福岡市の都市集積が本格化したのは、明治期も終わりになってからだ。明治43（1910）年、福岡県の主催で九州沖縄八県連合の共進会が開催された。これは当時、欧米諸国が行っていた万国博覧会に倣ったイベントで、これを契機に路面電車が開業、道路や橋の整備が一気に進められた。中洲地区に飲食店や劇場などが集まるようになったのも、この頃を端緒としており、現在の天神地区の市街地の基礎は、この会場整備がきっかけとなっている。共進会の終了後は、中央官庁の出先機関や東京・大阪に本社を持つ会社や銀行などの支店の立地につながり、福岡市は「支店経済都市」として発展した。

しかし、福岡市が近代都市として他に比べて群を抜いた存在となったのは、大正の終わりから昭和初期にかけてである。昭和10（1935）年頃までにデパートのような新しい商業施設が開業し、映画館などの大衆娯楽施設が集積するなど、ちょっとしたモダン都市の様相を呈してくる。

一方、現在のような広域中心都市的なイメージの福岡は、第二次世界大戦後、昭和30年代からの高度経済成長期を背景に、商業集積やメディアの集積などにより形成されたものである。天神地区の開発が進み、昭和40年代から50年代初頭にかけて、商業施設が続々と誕生した。昭和51（1976）年には天神地下街がオープンしたが、地下街の歩行通路に石畳を敷き、外国語のアナウンスを流すというのは、いかにもこの地らしい、新しもの好きの「軽み」が表れているように思う。

一方の博多地区も、ビジネス街として発展した。昭和50年には山陽新幹線博多駅が開業し、福岡はビジネス・観光両面における九州の中枢都市として、その位置を確立していく。福岡は、日本社会全体が運輸・通信・サービス産業を拡大していく時流にうまく乗って、近代都市としての体裁を整えてきたとも言える。

また、福岡市の市制施行100周年を記念して、平成元（1989）年に埋立地の百道浜（ももちはま）で開催された「よかトピア（アジア太平洋博覧会―福岡'89）」の会場跡地は再開発され、ランドマークの福岡タワーや福岡市博物館、福岡ヤフオク！ドームなどが集積する新たな街となり、アジア・太平洋地域の国際交流拠点となることを目指している。

こうした近代の歴史を見ると、福岡市は、歴史は古いが近代的な都市性という意味では新しい地なのである。そして、工業都市にはならずに150万都市となった。これは近代都市としては非常に珍しいケースだと言える。

上書き都市・福岡

福岡市は、特に江戸期以前が顕著であるが、豊かな利潤を求めて、頻繁に新興勢力や外国人が出入りし、この地に影響力を持つ政治勢力が交代を繰り返してきた。そうした歴史的な背景がこの地の風土や人々の気質をつくってきたと言える。

古い歴史を持ち、支配者が交代を繰り返してきたという点では京都と似ているが、現在の福岡を見ると、京都と異なって福岡には歴史がもたらす重苦しいものがない。重厚長大なものを累積させてこなかった、その身軽さこそがこの地の本質をつくってきたのではないだろうか。

また、長らく対外貿易の中心地として栄えてきたということは、この地が生産の場ではなく、情報の行き交う場であったということを示している。だからこそ、近代において、工業都市としてではなく、商業・情報都市として発展したのだろう。支店経済都市という身軽さも、うまく作用したはずだ。新しさ、面白さが歓迎される。あまり知られてはいないが、ゲーム産業の先駆者的な人物を福岡市は多く輩出している。

支店経済という表現は、かつて批判的・揶揄的に使われていた。しかし今、そのような表現はほとんど使われない。重厚長大なものを持たない福岡市は、それ故に消費を呼び、新たな都市集積を生み出している。では、そのバックグラウンドに歴史的なものは無いかというと、そんなことはない。

こうした福岡市の特性について表す時に、私は最近、「上書き都市・福岡」という言葉を使っている。支配者の交代や時代の流れによって古いものの上に新しいものが造られ、都市は上書きされ、変化、あるいは進化していく。しかし注目すべき点は、コンピューターの上書きと同様に、古いデータは完全に消えて無くなるわけではなく、新たなデータの下層部に残っている点だ。実際に開発の進展に伴う発掘調査で、サルベージされて歴史の古層があらわになったケースが実に多い。

福岡市営地下鉄建設に伴う発掘調査（昭和52年～）をはじめとして、市内の道路の拡幅やビルの建て替えに伴う発掘調査で、弥生時代から近世に及ぶおびただしい遺跡群が発掘されている。ごく最近では、福岡市博物館近辺の西新町（にしじん）遺跡は県立修猷館（しゅうゆうかん）高等学校の建て替え工事で発見されたものだ。また、福岡城内に建設された平和台球場の改修工事の発掘調査（昭和62年）では、鴻臚館の遺構という超一級の歴史的遺産が発見された。こうしたことからも、まさに現代の街が遺跡の上に乗っていることを実感できる。

福岡市の街中では、特にここ40年ほどの間に、パズルのピースを埋めていくかのように、こうしたさまざまな発見や発

掘が続いており、それらを基に考古学者たちがイメージをつないでいる。こうした発見の連鎖によって、瓢箪のような地形の上に立地した中世の博多の都市景観も明らかになってきた。これまで文献資料の中で触れていた歴史が、こうした遺跡や遺物の発見によって、形を伴って徐々に明らかにされてきたことは歴史研究にとって、非常に意義深い。

何より面白いのが、新たな街をつくるための工事、すなわち街を上書きする行為によって、古い歴史がどんどん姿を現してくることだ。これは福岡市の歴史が層を成している状態だからこそであり、このような場所は多くはないだろう。

2年前にリニューアルした福岡市博物館の常設展示は、まず金印の実物を見ていただいてその背景を解説し、それから旧石器時代や縄文時代、奴国の時代、鴻臚館の時代、博多綱首の時代、博多豪商の時代、福岡藩の時代、近代都市・福岡の時代、そして現代の福岡というカテゴリーで分けている。大きな特徴は、中央政権の所在による時代区分ではなく、この地域独自の価値観に基づく時代区分で展示を見せようとしている点だ。

それぞれの時代ごとの展示は必ずしも壁で囲われていない。特に近代の展示と民族展示は、低い仕切り越しに相互に見通せるようになっている。過去と現在は相互に行き来する世界であり、現在から透かして過去を見ることができる。ここにも、歴史の古層と上書きという理念がにじみ出ていると言えるのかもしれない。

また、博物館として幸運だったのは、さまざまな調査による新しい成果が開館に前後して相次いで公開されたことである。一例を挙げれば、昭和50（1975）年に韓国南西部の新安沖で一艘の沈没船が発見され、水中考古学がアジアで最初に話題になった。これは京都の東福寺が派遣した造営料唐船で、博多承天寺の塔頭・釣寂庵が経営を担い、筥崎宮も関与していたこと、また博多へ向かう途中で難破したことが判明した。この沈没船からは、人名が記載された木簡が多数発見されたが、日本人名ばかりだった。これは貿易の実質的な主導権が中国人から日本人に移っていたことを意味する。まさに物が歴史の事実を示している。そこで、開館時の目玉の一つとして、韓国でレプリカを作ってもらって展示した。こうした発見は開館後も多くあるため、博物館は2年前に一度リニューアルを行い、最新の成果を展示に盛り込んでいる。

福岡市博物館は、よかトピア（アジア太平洋博覧会）のパビリオンとして1年間使用した後に博物館として開館、今年で25周年を迎える。つまり、博物館の歴史は、同じ埋立地に建設された百道浜という街の歴史と重なっている。

今秋には開館記念日を中心に、金印発見の地である志賀島から、金印の現住所である百道浜までの一帯を「金印ロード」と名付け、地域と一体になったイベントを開催したいと考えている。

また、最新の発掘成果を取り入れた特別展「新・奴国展」を10月17日から12月13日まで予定している。

歴史が祭り気質を醸成

福岡市博物館の常設展示の最後は、「福博人生」――現代の福岡に生きる架空の四世代家族を通して、生活習慣や儀礼、地域の人々の生き方や価値観などを説明し、「山笠の世界」すなわち祭りで終わる。

歴史ある商都であり多様な人々と接してきただけに、この地の人たちには他所にはない独特の気質が醸成されてきた。一般的に、「おおらかで陽気、熱中しやすいが飽きやすい、物怖じしないが恥ずかしがり屋」と言われるが、この気性は伝統的でかつ創造的な博多の生活スタイルを生み出した。また、「新しもの好き」「面白がり」という気質もある。その一方で、義理堅く、近所づきあいを何よりも大切にする。

福岡市には、博多祇園山笠や博多どんたくなど全国的にも有名な祭りをはじめさまざまな祭りがあるが、祭りが栄えてきたのは、人々の気質によるところが大きい。

こうした人々にとって、山笠は、家族や地域の結束を維持し、伝統を守り、かつ創造し、文化を発信して多くの人を呼び集める仕掛けなのだろう。山笠には都市と地域社会を維持し、再生する力がある。

山笠をはじめとした祭りが存在し、人々の宝として引き継がれているからこそ、福岡市の街は幾層にも成った歴史の上書きを繰り返し、しかし過去を抹殺することなく、今も進化し続けているのだろう。